
湖畔

袴垂レ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湖畔

【Nコード】

N6339F

【作者名】

袴垂レ

【あらすじ】

「どうか聴いていただけませんか？私の過去を、私の地獄な行いを……。」「場末のバーで紡ぎ出される青年の言葉は、香の煙のごとく弱々しいものだった。大の男をこうまで苛む過去とは何か。身分の違い、友人との約束、差別。赤の他人にだからこそ、人は自分の恥を打ち明ける。そして、赤の他人だからこそ、他人の恥を自分の肥やしにする。」

(前書き)

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによつて気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。以上をご了承された上で読み始めてください。袴垂レ 記

2008/12/6

「私は、」

青年はそう言いかけて、口を噤んだ。何かをつぶやいたようだが、店内の喧騒が彼の弱々しい声を完全に覆い隠し、どこかへ運び去ってしまった。青年はうつむいた。もともと大人しい性格の人なのであろう。何とない青年の仕草の一つ一つが、必要以上にそれを際立たせた。

この青年は、バーで飲んでいた私の横に座ってきた。話しかけてきたのは、あちらからであった。何のことはない挨拶、簡単な自己紹介、ありがちなご機嫌伺いと、初対面の人間同士が交わすべき言葉は最初の数分で大体済ませた。歳は今年で二十五であると言うが、とてもそうとは思えない。通常の二十五歳の青年からもっとも感じられるものの一つは生気であると私は思っていたからだ。彼の顔はひたすら青く、失望ばかりが見える。

私は彼に催促してみることにした。

「故郷で何かあったのですか？」

彼は今、自分の故郷について話していたのだ。

青年は顔を上げ、一度私の顔を見たが、すぐに目を逸らしてしまった。その弱者の目に私はじれったささえ感じた。

しかし、彼が再び私の方に向き直った瞬間、私の背筋に緊張が走った。青年の目にはまるで何かを狩るような鋭さがあったのだ。やがて、その鋭い目からは大粒の涙がこぼれ出した。重力に忠実な液体は青年の着古した作業着の色を濃くしていく。

青年は私の袖を掴んだ。恐ろしく強い意志を感じた。

「どうか聴いていただけませんか？ 私の過去を、私の地愚な行いを……。」

消え入りそうな声で懇願する彼を見捨てる程、私は冷酷な人間ではない。私は彼の話につき合うことにした。

私はとある寒村の小さな農家の家に、次男として生まれました。そのため、私は幼いころより貧しい生活を強いられてきました。冬は履くものを使い古した草鞋しかなく、ほとんど裸足に近い状態で出歩くものですから、足の裏はひどいあかぎれを起こし、一歩踏み出すことにも激痛への恐怖に怯えていなければなりませんでした。毎日が苦痛でした。やがて秋もたけなわの頃、無理な生活が続いたためか、母は病死し、それを追うようにして父も死にました。そのとき、私は十一歳でした。

まる一年が過ぎました。生活は苦しくなるばかりでした。私には一人の兄がおりました。兄は、私や弟がどんなにひどい悪戯をしても怒らず、私たちを優しい目で見守ってくれました。しかし、その時の兄の目にはかつての優しさは完全に消え失せていたのです。いつそのこと、死んでしまおうかと思っただけもありました。しかし、私は生きたのです。

友がいたからです。彼は私とは全く違う身分の人間でした。彼は村の地主の息子だったので。今思えば、どうして彼は私の友でいてくれたのが疑問でなりません。仕事がない日は彼と私はよく近くの湖畔に行き、日が暮れるまで遊びました。

「習い事があるから。」

そう言っつて、秋の夕日を背景に去って行く彼の後姿がどんなにか大人びて見え、格好良かったことか、金も時間もなく、家の仕事のために学校を休みがちだった私には計り知れませんでした。

家に帰ると、家の前に鬼のように恐ろしい顔をした兄が立っていたものでした。

「家の手伝いもせんと、こんな遅まで何しとつた！」

そう言っつて、私を怒鳴りつけるのでした。しかし、あの友と会っていたことを言っつと、兄の態度は一変し、すぐに私を家に中に入れてくれました。

いつものことながら、不思議に思っていた私は兄にその理由を尋ねたのです。

兄は口元を緩めながら答えました。

「お前の友達は、旦那はん（地主）のあんちゃん（長男）やからな。お前はあの子の顔ではなく、懐さえ見とれば、それで良いがや。」

兄のこの言葉は、本気で百回頬を打たれるよりも、痛かったのです。兄は私にこそ泥の真似をしろというのでした。しかし、私は兄が恐ろしくて何も言い返すことは出来ませんでした。

その夜、私は一人、布団の中で泣きました。友が余りにも哀れに思えたのです。考えてみると、兄だけでなく、友に会う全ての人が、友の懐だけを見ていることに気付いたからです。つまり、友は真の友を持たず、今まで生きてきたのです。それを知らずにいるのもまた哀れでした。友は誰からも真実を知らされず、まるで籠の中の鳥のように扱われてきたのです。

私の涙が流れに流れ、布団を通り抜け、薄汚れた畳までをも濡らした時、私はある決心したのでした。

翌朝、弟は私を嘲笑っていました。私の涙の跡を見て、私が寝小便をしたと思っただからです。決心のことしか念頭になかった私は、弟の嘲笑を黙殺しました。

昼、私は虚ろな足取りで友との待ち合わせ場所へと向かいました。家の前の草原は赤く色付き、虫の音が聞こえてきました。その音は私にあることを問い掛けたように感じられました。その問いとは、「果たして、真実を知るのが本当に幸福になるのか？」

というものでした。私はその問いに後ろ髪を引かれながら、歩きました。いつも見慣れた周りの風景、田園の傍を流れる小川、遠くに見える赤い山、その全てが私を引き止めているように思われたのです。

（一度決めたことだ。今更、変えられまい。）

その思いだけが私を突き動かしていました。ぴたぴたと私の足の裏が土を鳴らしました。

家を出てから約二十分後、もつともその二十分は私にとっては何時間にも感じましたが、友との待ち合わせ場所である湖畔へ着きました。

友は既に湖畔に来ており、私を待っていたようでした。友は私の苦悩を全く知らず、気軽に話し掛けてきました。私にはそれさえも、哀れでならなかったのです。「君の目の前にいる男は、これから君に不幸をもたらすかも知れないのだぞ」、そう言いたかったのですが、私は辛うじてその声を飲み込みました。

代わりに私は友に明るい挨拶を返したのです。そのことがどんなに私を苦しめたか計り知れませんが、何故なら、私はこれから真実を言おうとしているのに、別件とはいえ一つの真実を心に納めてしまったのですから。

友と私は、いつものように遊びました。湖といっても、縦十メートル、横二十メートル程の小さな池でした。それでも、小さな子どもには、いくら遊んでも尽きることはない好奇心を与えてくれたのです。その日は、湖に釣り糸を垂れました。友は笑っていました。それは他の誰でもない、私に向けられたものであり、私の心を癒すものでした。水滴が水面から出た釣り糸を伝い、湖へと帰ってゆきました。一度奪われた水滴は再び湖に戻るので、彼の欺かれ、失われ続けた十二年間もまた、彼に返されるべきなのです。

この思いが、私を勇気付けました。ついに私は友に説き出したのです。

「言いたいことがあるんやけど……。」

彼は私の方を見ました。

「ん、なんけ？」

その時、一陣の風が起こり、釣り糸を左右に揺らしました。深緑に染められた水面に映る私たちの影が大きくぶれました。その影のぶれが収まった時、友が驚いた表情をしていることに気付いたので

す。

私は水面に映る友の顔から少し離れたところにある自分の顔をみ

ました。友も驚くはずでした。私の表情は、まるで別人のように真面目なものに変わっていたのですから。その顔に穴が開き、そこから空気が漏れてきました。

「実を言つと、あなたの家を訪ねる隣人の多くは、あなたの家の人でなく、あなたの家の人の懐を目的にします。あなたの家には土地がある。幸福な生活もある。やけど、そいつらにはそれがない。やから、幸福な人にすぎる。やけど、そんなやつらも恥ずかしいと思つから、心は懐に釘付けになつていても、目は顔を見とる。やから、おわ今、あなたに言おう。おわのあんちゃんも旦那はんの懐しか見とらん。やけど、おわ違う。おわ、幸せや。おわの心はあなたの顔を見つめとる。」

友は啞然としていました。正に、見知らぬ者にいきなり頬を打たれた心地であつたに違いありません。風が再び私たちの間を通り抜けました。友はじつと私の顔を見つめていましたが、返事がくる様子はありません。友が私の言葉に無反応であると思えてきたのか、私の口はいつのまにか、わなないていました。

「やはり、おわあなたを不幸にしてしまつたんけ？」

私の目から涙がこぼれました。顔を埋めかけた私の肩を、友はそつと支えてこう言つたのです。

「そんなことない。おわ、嬉しい。あなたにそんな風に氣遣つてもろつて、おわ、嬉しいよ。」

友はおもむろに自分の履いていた靴を脱ぐと、私に差し出しました。

「あなたは、おわの無二の友や。これからも一緒に遊んでほしい。やから、足を大事にしてくれんけ？」

そう言つて、彼は真新しい皮靴を泥だらけの私の足に履かせようとしてました。

「おつと、これじゃあかん。」

友は持つていたハンカチで私の足についた泥を丹念に拭つてくれました。そして、私が見えるはずもない靴を履かせてくれたのです。

私は声を上げて泣きました。最早、泣くこと以外考えられなかったのです。友も泣きました。湖に一筋の陽光が差ししていました。そのとき、私たちは誓ったのです、「自分たち以上の仲を他の誰とも結んではいけない」と。

「良い話じゃないですか。」

青年は私の批評など気にも留めていないように酒をあおった。グラスに注がれた酒が彼の喉を通る。

「いえ、ここまでは前置きです。ここからが問題なのです。」

酔いが回ってきたのか、青年は真っ赤な顔で舌を動かす。次第に饒舌になってゆく。

(それが私の特技なのだから、当然か。)

青年は感情が激し、今にも泣き崩れんばかりの様子だが、私は心の中で青年を冷静に見ていた。

私は一口、酒を飲んだ。こんなに美味かったであろうかと思った。きつと、青年との会話がそうさせているのだろう。

「それで、どうしたのですか？」

私は青年に話の続きを乞うた。青年は最早、止め処もない感情に任せて話すだけの機械と化していた。ただ、それが涙を流し、ときにグラスに注がれた酒を飲むことを除けば。

あれから二年が経ちました。私は友の取り成しのおかげで、村の中学に通うことが出来ました。

この進学が変えたのは、私の肩書きだけではありませんでした。いかなる他人をも、敵愾心というレンズを通してしか見ることでなくなつた兄の表情も次第に角を落とし、常人以上の寛容さを持つようになつたのも、この頃からでした。いくら友が地主の友人であるといつても、彼の一存で教育関係者に口利きができるはずがありません。兄は、日々深まりつつある、我が家と「旦那はん」との仲にほくそえんでいたのです。

友と私はいつも一緒でした。登校も、下校も、そして授業中も、私は彼と意思疎通していました。

友はよく言っていました。

「あんたは、うちのお金で学校に行つとることを気にしとるみたいやけど、気にせんていいんよ。あんたみたいな人が世の中を引つ張つてゆけば、それ以上の喜びなんてあるもんけ」

この言葉がどんなに嬉しかったか、私には分かりません。私は、彼を含めて色々な仲間と付き合いました。時に怒り、時に笑いました。それでも、彼と私は鉄の鎖で結ばれたようで、決して別れることはなく、他の友と自分たち以上の仲を持ちませんでした。

時が流れてゆきました。私は中学三年生になりました。

その年の夏のことです。夏休みを終えて、学校に出てきた私の元に友が擦り寄ってきました。

「おい、聞いたけ？」

「何かあつたん？」

「転校生が来るらしいんよ。」

「へえ。」

夏休みが終わって、憂鬱になっていた私には友のもたらした情報など、有益に感じる余裕はなかつたのです。ただ、珍しいこともあるのだなと思つたに過ぎなかつたのです。

休みが明けて最初の授業が始まりました。先生が教室に入ってきました。校舎が古いものだから、かなり大柄な先生が歩くと、床が大きな音を立てました。学級委員が号令をかけました。

お決まりの挨拶を行った後、先生は転校生について触れました。学友たちの多くはこのことを知っていたらしく、さほど大きなどよめきは起きませんでした。

やがて、先生に連れられて、一人の少女が現れました。先生が大柄であつたためか、少女はとても小さく見えました。彼女を見たとき、私は息を飲みました。彼女の様子が余りにも可愛らしく見えたからです。彼女は豊かな黒髪を備え、瞳にはこの世のものとは思え

ない美しい輝きがあり、肌は皮膚の下まで透けてしまうのではないかと思うくらい白かったのです。男性学友の多くは、私と同じ感想を持ったことでしょう。

私は友を見ました。友も例外ではなかったようで、ひたすら彼女に視線を注ぎ込んでいました。私は嫌な心地がしました。友が彼女ばかりを気遣い、私を軽んじるのではないかと思われたからです。

しかし、私のその不安は、すぐに解消しました。友は私の視線に気付くと、こちらを向き、にっこり微笑んでくれたからです。私はほっと胸を撫で下ろし、教室から見える夏の風景に心を傾けました。私はその少女と親しくなっていきました。彼女が私の隣の席に座り、話し相手という役目を私に求めたからです。求められた以上は、引き受けねばなりません。私はありったけの気遣いをもって彼女を迎えました。

彼女のことを知るに連れて、私は彼女が好きになっていきました。しかし、私は友以上に親しい人間を持つことを決まらせないとい心の中で誓っていたので、彼女との仲は他の学友と同様のものでもしかなかったのです。ですが、心の何処かに彼女を自分のものになりたいという気持ちがあったことは否定できません。それが普通なことであり、恋愛においては友との約束も無意味、とあの時気付いていればと思います。

気がつくと、教室の窓から眺める風景は冬のものとなっていました。

私を含め、学友たちは勉学に没頭していました。高校入試が近かったからです。私の家には暖房器具がなかったので、放課後は学校の図書館で勉強することにしていました。しかし、友は決して図書館を訪れることはなかったのです。それは、私が彼を誘ったとしても同じでした。

私は気が気ではありませんでした。しかし、私は勉強をせねばならず、友の都合が悪いのだと片付けてしまいました。友は私以上の仲を誰とも持たない、そう確信していた私は鉛筆を置くこともなく、

ひたすら勉強に勤しみました。

冬休みが近付いてきました。長期休暇に入ることであるし、きっと私と共に過ごす時間を作ってくれるだろうと思ひ、私は友を湖畔に誘うことにしました。冬の湖畔もまた乙なものであるうと私は思いました。いえ、それ以上に、友と私の思い出の場所である湖畔ならば、きっと友も受けてくれるだろうと考えたのでした。

私は授業の合間を見計らって、友の席へと向かいました。友は一人で考え事をしているようでした。私は自分の申し出を飲み込みました。彼の苦悩を解きたいという衝動に駆られたのです。

私は友に話し掛けました。

「どうかしたん？」

友は驚いたような表情をしました。急に話し掛けられたためにそうなったように思いましたが、それだけでは説明しきれない何か彼の顔に浮かんだのを私は見逃しませんでした。

友は虚ろな返事をしました。

「いや、別に……。」

「あなたとおわ無二の友やろう？隠し事なんてしられん。」

腕を組み、言い含めるように私は友に説きました。友は私の目をじっと見つめました。私も彼の目を見返しました。無言の時が過ぎてゆきました。

やがて観念したのか、友は首を振って微笑を浮かべました。

「いやあ、あなたにやかなわん。分かった、全て話そう」

友は辺りを見渡し、何かを探しました。そして、問題がないことが分かったと、一度深呼吸して私に手招きしました。顔を寄せるといふのです。私は友の言う通りにしました。

「実はな、ある娘が好きになったがや」

私は友の意外な言葉に戸惑いました。ですが、それは友が一つ成長したことであり、私は友と一心同体と考えていましたから、この上なく嬉しいことだったのです。ただ、彼の好きになった娘が誰かを聴くまでは。

「その娘は、この間転校してきたあの娘なんよ」

私は多少驚き、また戸惑いました。しかし、一度は自分もあの娘が好きになっていった手前、余り不平は言えません。それに、彼も私と同様、自分たち以上に親しい人間を持たないだろうと信じていました。だから、私は感情を握りつぶしました。口元を緩めて彼に応対したのです。

「ふむ、そんで、なんで悩んどるん？」

その時、着席を催促する先生の声が、無情にも私と友の間を裂きました。

「後は、明日の夕方、湖畔で話そ」

私は自分の席へと急ぎながら、うなずきました。隣には少女が座っていました。少女は近頃、表情が明るくなってきたように思われていたので、納得がいきました。私が彼女の方を見ていると、彼女が私の方を見て笑いました。私は前に向き直りました。動悸が激しくなっていました。

翌日、その日は休みでした。夕方まで少し時間の空いた私は、家の買い物頼まれ、商店街へと歩いていました。

私の家から商店街に行くには、峠を一つ越えなければなりません。私は慣れた足で峠を上っていました。薄らと雪に覆われた道の両側に立つ森の木々は、必死になって野分に耐えているようでした。

私もまた例外ではなく、寒風は既に真つ赤になっている私の頬を何度も叩きました。私はその風から逃れるために、手拭いを襟元に巻くことを思いつきました。立ち止まり、手拭いをズボンのポケットから取り出そうとした時、風に乗って聴きなれない歌が私の耳に舞い込んできたのです。

不思議に思った私はその声の主を探すために、声の聴こえてくる森の方へと足を運びました。声が次第に大きくなってゆくのを感じました。やがて、私はその声の主を見つけました。その声の主とは、あの少女だったのです。

私が見ていることも知らず、彼女は歌い続けていました。綺麗な歌でした。しかし、その歌詞のほとんどが聴き取れなかったのです。その歌が中国語で歌われていることを知ったのはそれから間もなくでした。ですが、学校での彼女の流暢な日本語には、中国語の訛りは微塵も感じられませんでした。彼女は紛れもない日本人です。私は訳が分からなくなりました。なぜ、日本語にも中国語にも精通した女子中学生がいるのか。推測が私の脳を駆け巡りました。次の瞬間、目の前が明るくなったような錯覚を覚えました。私は彼女についてすべてを悟ったのです。

戦争が終わり、満州から引き上げてきた日本人の多くは、金も土地も持たない、まさに着のみ着のまま状態であったことは、想像に難くないことと思います。彼らの中には国内の親戚を頼り、どうにか食い扶持を探し当てた人もいたでしょう。ですが、皆が皆親戚から援助を受けられたわけではありません。それに、身寄りのない人はどうすれば良いのでしょうか。戦争が終わって間もない日本では、彼らに分け与える食料や財産が明らかに不足していました。しかし、人間は食わなければ生きていけません。誰かが彼らを救わねばなりません。彼らを救ったのは国でした。その救済手段こそが、私の故郷への開拓団派遣だったのです。

当時、金がないのは地主も同じでした。寧ろ、地主の面子を潰さないためにも、その地域内の住民を保護する義務があったくらいです。国は、そのような状態であった地主から、森林などの未開発な土地を買い上げたのです。そして、全国から集めた開拓団志願者にその土地を開拓させる仕事を与え、食料と金を支給しました。また、自分で開拓した土地は、自分のものにしても良いとしたのです。開拓地を国や他の開拓団員に売却して、すぐに土地を離れた人もいました。ですが、数人の団員はそこに定住することを決めたのです。

これに、地主はひんしゆくさせられました。両者の同意の上とはいえ、権威を傘にして半ば強引に買い上げられた、もとは自分の土地に、どこの馬の骨とも知らない者が住み着いたのですから、訳も

ありません。定住を決めた人々の間で、寄り合いができました。地主を中心にした寄り合いからは独立したものでした。このことは、地主を一層怒らせました。地主の意向に沿う形で、旧住民は彼らを差別しました。子どもたちも、例外なく差別に加わらざるを得ませんでした。「悪い人間だから親に見捨てられ、ここまで流れ着いた汚い者たちなのだ」といった具合です。

思わず、感嘆の声が漏れました。彼女は私の気配に気づき、歌を止めました。

彼女は私の顔を見るや、雪の上に座り込んでしまいました。そして、手で顔を覆いしゃくり泣き始めました。その泣き声は完全に絶望で満たされたものだったのです。

日頃友から受ける教示、また友が彼女を愛しているという事実から、私は幸いにして彼女への差別が不当なものであることを認めていました。寧ろ、彼女の境遇を思うと、胸が締め付けられる思いがしました。

気が付くと、彼女に近付いてしゃがみ、優しい声で話し掛けていたのです。

「泣かれんな。おわ誰にも言わん。おわあなたの気持ちちや、分かるんかもしれんけど、なるべく分かるようにする。やから、泣かれんな。な？」

私は彼女の頭に手を伸ばしました。彼女の肩が跳ね上がり、頭も少し後ろにさがりましたが、辛うじて手が届きました。絹のような肌触りに、右手が反応しているのが分かりました。この行為には何の根拠もありませんでしたが、こうすることによって、多少は彼女の気持ちが悪く落ち着くような気がしたのです。私は彼女の頭を撫で続けました。

その時、不意にふわっとした白いものが私の胸を襲いました。気が付くと、彼女が私の胸に飛び込んでいたのです。私は雪の上に倒れていました。私の身体の上には、ひたすら咽び泣く彼女がいました。私の心臓はこれまでにないくらい激しく動いていました。私の

理性は何処かへ飛んでいました。触れると融けてなくなってしまうのではないかと思われるくらい柔らかな彼女の背を抱きたいという衝動に駆られたのです。私の両手が彼女の背に回りかけました。しかしその時、湖畔で友と交わしたあの言葉が私の耳に響いたのです。「自分たち以上の仲を他の誰とも結んではいけない」

一瞬のうちに、その言葉が何度も私を打ちました。理性が再び復活した時、私は彼女の背から手を遠ざけ、体を起こしていました。彼女に言いました。

「なら、おわこれで行くわ。家で兄弟たちが待つとるがでの。」
私は立ち上がり、彼女から少し離れたところで、力強く言いました。

「絶対に誰にも言わんから。」

その言葉が、どれだけ彼女を勇気付けたのでしょうか、彼女は何度も雪に額を押し付けていました。有難う、有難うと言って、泣いていました。

私は森から道へ出て、商店街に向かって歩き出しました。振り返ると、森から出てきた彼女が私に向かって手を振っていました。陽光に照らされて、風になびく黒髪が美しく光りました。気が付くと私も彼女に手を振り返していました。

私が家に帰ったのは、最早夕日が遠くの山にかかってきた時でした。大急ぎで荷物を置き、家を出ようとしたところ、兄が入り口の戸を塞ぎました。

「今晚は、出歩かん方がいい。」

「今ままで最も厳格な声でした。」

「なんで?」

「今朝は、晴れなんに吹雪いとった。こりゃ、山の狐が嫁入りしたに違いない。」

「旦那はんの息子に会いに行くんよ? いいが?」

兄は合理主義者である反面、理想主義者でもありました。兄はそのどちらにも盲目的に信じ込んでいたのです。兄のこの性格は時に扱

い易く、また時に扱いにくいものでもありました。しかし、ここでは合理主義者の兄が、理想主義者の兄を説き伏せたようでした。

「うつむ、分かった。やけど、なるべく早く帰られ。」

兄は道を譲りました。私は兄をほとんど省みず、駆け出しました。手拭いが襟元で翻りました。

湖畔に着くと、友がコートのポケットに手を入れて震えているのが見えました。私を見つけた友が私に走り寄ってきました。

「あんたは、いつも遅れてくる人やねえ。」

そう言われると、幼少の頃から私と友はよく遊んできましたが、私が先に着いていたことはありませんでした。そうこうしているうちに、夕日がほとんど山に没してしまい、辺りが暗くなってきていました。

「おお、これはあかん。早く昨日話せんかったことを話さんと。」

友はそう言つて、切り株を指差しました。切り株には全く雪が積もっていませんでした。どうやら先に来ていた友が、私たちが座る為に雪を払ってしてくれたようでした。私と友は、切り株に腰掛けました。

座るや否や、友は話を切り出しました。

「話は他でもない、この前話したあの娘とのことや。」

私は頷きました。頷きながら、誓いに従い、友が少女のことを諦めることを私は期待していました。これには確信がありました。日常で彼女を友以上に思うことはなかったし、何といつても、森の中で私は彼女に手を出さなかつたのですから、きっと友も私の努力に答えてくれるだろうと思っていたのです。しかし、友の次の言葉は、私の予想とは全く反したものでした。

「今まで、おわ地主である父さんに縛られて生きてきた。何の自由もなかった。父さんはおわのことをただ自分の財産を保つものとしてしか見とらんかった。やけど、唯一つだけ自由があった。それは、あんたと会って遅くまで遊ぶことやった。このことは、おわの父さんに対する唯一の抵抗でもあったがよ。やから、あんたと結んだ誓

いは決して忘れん。いや、忘れようとしても忘れられん。そして、あなたには本当に感謝しとる。やけど、やけどよ、おわにはもつと大事な人が出来てしまった。それがあの娘や。あなたは知らんかもしれんけど、あの娘は開拓団の娘や。おらはあの娘に自由を教えた。あの娘が好きやから。やから、やからな……。」

友はそこで一度大きく息を吸いました。抑え難い興奮のため、友の顔が真っ赤になっていているのを私は、闇を通して感じました。私は気が狂いそうでした。耳鳴りがしました。頭を抑えてその場に転がりたいと強く願いましたが、それは叶わないことでした。次の言葉が私を切り株から立たせたからです。

「やから、おらはあの娘と駆け落ちして、あの娘に自由を示す！」
私は無言で切り株から立ち上がり、駆け出していました。気が付くと、涙が頬を伝っていました。涙を何度拭いても、止め処もなく流れてきました。また、私は幾度となく転びました。その道は歩き慣れており、目を瞑っても歩けると自負していたのにです。

家に辿り着いたとき、体中傷だらけで、血が至るところから流れていることに私は気付きました。家に入ると弟が私を出迎えました。私の姿を見るや、叫び声を上げて家の中に入っていました。程なく、兄が走り寄ってきました。

「どうしたかよ、その傷は!？」

友のことなど、理由に出せるはずがありません。私は暗かったから、崖に落ちたと説明しました。

「ほりや、言わんこつちやない。やはり狐の嫁入りや。すぐにお医者者を呼んで来い！」

兄に命じられた弟は家から飛ぶようにして出て行きました。その時、痛覚は皆無でした。ただ悲しかったのです。何故だか分かりませんが、悲しかったのです。私は兄の胸に顔を押し当てて泣きました。

「おお、痛むんか。ちよつと我慢しられや。直に、お医者者が来る。」
私はそのまま気を失いました。あとで聞いた話によると、私の怪

我は五箇所の傷口をそれぞれ何針も縫う大怪我だったそうです。

次の日の昼、私は目を覚ましました。兄弟はそれぞれ仕事と学校に行っているのか、家にはいませんでした。

(喉が熱い……。)

真つ先にそう思った私は布団の傍にあつた水筒の水を飲み干しました。家族が用意してくれていたのでしょうか。それから、昨夜のことを考え始めたのです。

夢であつて欲しいと願いました。しかし、今実際に私は怪我を負つており、少しでも動くと言が痛みました。夢である可能性は低いと考えました。そう思うと、目から涙がこぼれました。

(友は、おわが無二の友と信じとつた友は、無二の友であるはずのおわを裏切つたがや。)

初め、そう思いました。しかし、その思いは時間が経つに連れて脚色されてゆき、悲しみは憎しみと怒りへと変わりました。

(そうや、友、いや、あんな奴は最早友じゃない。あいつはおわのあの娘への気持ちを知りながら、そして、おわがあいつを憚り、あの娘に手を出さんかつたんを知りながら、おわを裏切つたがや。地主の跡継ぎという地位を利用して)

私は布団から這い出ると、まだ激痛を紛らわそうとさえしない体に鞭打つて家の棚によじ登りました。そして、そこからあるものを取り出したのです。そのあるものとは、靴でした。三年前、湖畔で友からもらった靴でした。私はその履き古されてぼろぼろになった靴を乱暴に棚から引きずり出すと、家の囲炉裏に投げ込んだのでした。

時折、火の中で靴がはねました。私はこの上なく愉快な気持ちでその靴の形が壊れてゆくのを楽しみました。その靴に友を重ねたのです。

(そうや、あいつもこの靴のような目に遭わせてやるう)

最早、私の背徳を止めるものは何もありませんでした。私は鞆から鉛筆を取り出すと、紙に文字を書き出しました。幸か不幸か、右

手には傷を負っておらず、自由に扱うことが出来ました。

十数分でその手紙は書き終わりました。私は心から満足感を味わったのです。

もしあの時、私に少しでも冷静な頭と客観的に自分を見る力があれば、友、いえ、友ばかりでなく私自身も、傷つけることはなかったでしょう。

それから怪我がよくなるまで私は毎日布団の中で悦に入っていました。

(これで、あいつに仕返しができる)

完全に狂ってしまった私はそのような歪んだ考えしか持てなかったのです。やがて、私の傷は次第によくなっていきました。

「明日は学校に行けるようになった」

医者から私の状態を聞いた兄が私に言いました。これを聞いた私は、兄に外出の許しを乞いました。兄は私に元気が戻ったことを喜び、快諾してくれました。

数日振りに、私は外の空気を吸いました。周りが変わって見えましました。しかし今思えば、周りではなく、私自身が変わっていたのでしょう。私は喜色を露わにしながら、足を引きずって目的の場所へと向かいました。その目的の場所とは友の家でした。

友の家の前に立つと流石に緊張しました。これからする自分の行いが友や自分に何をもたらすかを全く考えていませんでした。

私は友の家の門に付いている郵便受けに手紙を入れました。しつこいようですが、この少し前まで、まだ私はやり直せただけです。そうすれば、友も自分の傷つかなかったのです。しかし、私は最早後戻りが出来なくなりました。この手紙が密告書だったからです。内容は、友と少女の駆け落ちの計画があること、少女が朝鮮人であることなどでした。

意気揚々と家路に就いた私は、笑みを堪えきれず、止め処なく笑っていたため、弟に気味悪がられました。しかし、そんなこともその時の私には愉快なことに思えてしかたがなかったのです。

翌朝、私は兄に揺すり起こされて目を覚ましました。兄は余りの驚きのために、途切れ途切れになりながら、私に言うのでした。やがて、その驚嘆は私も共有するものとなるのでした。

「旦那はんのあんちゃん（長男）が自害なさったそうや。それも、心中らしい。」

私は飛び起きました。そして、詳しい事情を兄に聴きました。事の次第は次のようでした。

私の思惑通り、私の密告書は、友と少女の間を裂きました。このまま二人が諦めてくれれば、私は満足でした。しかし、友と少女はそれだけに留まらず、心中を決意したのです。友は完全に自由を奪われたことを、少女はこの村で生きてゆけなくなったことに失望したのでした。

思えば、あの時の友の駆け落ちの計画は、私が三年前に彼に与えた自由の延長にあつたのかもしれない。しかし、私は自由を与えたにも関わらず、その自由を二度と手に入れられない闇に押しやつたのです。

私に冷静な頭が甦つたのはその時でした。甦るや否や、その頭は私の過去を糾弾し続けたのです。私は耐えられなくなりました。このため、私は村を去り、街に出ることにしたのでした。永遠に消えない後悔という名の荷物を背負って。

グラスのロックが溶けて、音を発した。青年は完全に泣き崩れていた。私は青年の肩を支えてやった。もう夜も明け始め、店には私と青年以外に客は残っていなかった。

「すっかり酔ってしまいましたので、私は帰ります。つまらない話に最後まで付き合っていただき、有難う御座いました。」

「そうですか、では御気を付けて。」

青年は立ち上がると、よろめきながら出口へと向かった。扉は閉じられていた。青年はそのまま扉にぶつかつた。いや、ぶつかつたのではない。通り抜けたのだ。私はグラスに入った酒を飲み干した。

そして、グラスをテーブルに置いた。目を床に向けると、店内には青年が残したであろう真紅の血液が点々と落ちていた。

（嫌なもんだねえ、人の最期を見るのは。）

私はあの青年が既にこの世のものでないことを知っていた。だが、彼の過去を聴いてやることで、彼も少しは楽になったであろう。いや、楽になったのは寧ろ私か。思うに人間は、他人の失敗を聴き、それを喰らうことで生を得る魔物なのだ……。

完

(後書き)

近代文学で名作と呼ばれている作品の要素を混ぜ合わせてみました。どこかで聞いたことのある話だな、と思われる方も多いかも知れませんが、生産的な内容にならなかったことが自分なりの難点ですが、こういうのもたまにはいいか、と思っている次第です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6339f/>

湖畔

2010年10月8日15時10分発行